

冠詞が映し出す英語の世界

一定冠詞・不定冠詞・無冠詞が表すものの

高坂 京子

1. はじめに

英語の名詞は、定冠詞・不定冠詞を含む限定詞が絶えず付くことにより、日本語の名詞とは異なった世界を映し出している。冠詞の付け方は、話し手がモノ(名詞)をどのように捉えているかを反映するが、日本語には冠詞がないため、英語を学ぶ日本人は、冠詞に込められた話し手の意図を理解したり、自らが正確に使いこなしたりすることが困難である。

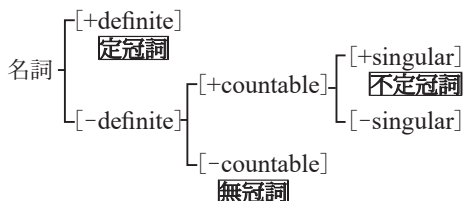
本研究では、そうした英語の定冠詞・不定冠詞・無冠詞の使い分けに焦点を当て、それぞれの用法の特徴を考察するとともに、冠詞使用に関する調査を通して、英語母語話者と日本人英語学習者がどのように冠詞を使い分けしているかを明らかにする。

2. 英語における冠詞の位置づけと特徴

本稿では定冠詞・不定冠詞・無冠詞を取りあげるが、その位置づけは図1の通りである。これを見ると、定冠詞・不定冠詞・無冠詞は並列的に論じられるべきものではないことが分かる。名詞の用法には「定」(+definite)と「不定」(-definite)があり、「定」と位置づけられるものには定冠詞theが付与されるが、「不定」なものには「可算」・「不可算」(± countable)に

区別され、可算名詞はさらに「単数」か否か(± singular)に区別される。不定冠詞が付与されるのは、そのようにして分類された不定・可算・単数の名詞に対してだけなのである。

【図1】定冠詞・不定冠詞・無冠詞



したがって、まず「不定冠詞vs.無冠詞」の対立は、可算名詞と不可算名詞の使い分けを反映したものであることを念頭におく必要がある。その使い分けの基準は、可算名詞が (i) はっきりした形をもつ、(ii) 中身がいろいろな部分から成る、という特徴を有するのに対し、不可算名詞は (i) はっきりした形をもたない、(ii) 中身が均質的、という点に集約できるだろう(石田2012)。

他方、「定冠詞vs.不定冠詞」の対立には、別の要因が関わってくる。Hawkins (1978) は、定冠詞theは「包括性」(inclusiveness)を有し、話し手と聞き手に共通の集合に属している指示物のうち、条件に合うものはすべて指示するのにに対し、不定冠詞aには「排除性」

(exclusiveness) があり、語用論的に限定された集合の成員から、指示の際に少なくとも1つの成員を排除する、という特徴があると主張している。また、津守(2008)は別の観点から「the」と「a」の特徴づけを行い、theの本質には「他のモノと区別されている」、「話し手同士の了解」の2点を挙げ、aの本質は「形あるモノのリンクが1つ、頭の中に描かれる」であるとしているが、いずれもその判断には難しさをともなうことが指摘されている。

つまり、「可算・不可算」は指示物自体の意味的特徴を反映するのに対し、「定・不定」は他との関わりにおいて指示対象をどのように捉えているか、という語用論的な判断が関わってくると言えよう。

3. 可算名詞と不可算名詞の使い分け(不定冠詞 vs. 無冠詞)

ではここで、まず可算名詞と不可算名詞の使い分けから考察しよう。可算名詞と不可算名詞の使い分けは、石田(2012)によると、(i) 仕切られているかどうか、(ii) 元の形が失われたかどうか、に大別され、それぞれがさらに次のように下位区分される。ここでは、その区分にそって具体例を検討していく。¹⁾

- (i) 「仕切られているかどうか」
 - ① 空間が仕切られているか [例(1)-(2)]
 - ② 時間が仕切られているか [例(3)-(5)]
 - ③ 一つの出来事と考えているか [例(6)]
 - ④ 種類が問題となっているか [例(7)-(8)]
 - ⑤ 単位が問題となっているか [例(9)]
- (ii) 「元の形が失われたかどうか」
 - ⑥ 丸ごとか部分か [例(10)-(11)]

- ⑦ 個体か加工品か [例(12)-(13)]
- ⑧ まとまりとして扱われているか [例(14)]
- ⑨ 動詞の一部のようにになっているか [例(15)]

それでは、(i) 「仕切られているかどうか」の例から見ていこう。扱う例文は、後に説明する「冠詞の使用についての調査」で用いたものなので、その正答率もここに示しておく。実際の調査では、すべての例文に関して例(1)のような設問形式を用いたが、ここでは(2)以降は正答部分をイタリック体で記すことにする。

- (1) もう一人入る余裕はありますか。
Is there () room for one more person? 【正答率25%】〈正解←1〉
1. 冠詞なし 2. a 3. the
- (2) 知らせを聞いたとき、天にも昇る思いだった。
I was in *heaven* when I heard the news. 【正答率36%】
- (3) この学校は100年の歴史がある。
This school has *a history* of 100 years. 【正答率36%】
- (4) 一瞬、車内に沈黙がはしった。
For a moment, there was *a silence* in the car. 【正答率46%】
- (5) 彼女はフランス語が上達している。
She is making great *progress* in French. 【正答率31%】
- (6) この映画は金持ち男を扱った喜劇だ。
This movie is *a comedy* about a rich man. 【正答率44%】
- (7) カフェテリアで軽い昼食をとった。

I had a *light lunch* at the cafeteria.

【正答率58%】

- (8) 私たちは彼を夕食に招いた。

We invited him to *dinner*. 【正答率34%】

- (9) 冷蔵庫のビールをさっと取り出して飲んだ。

I grabbed a *beer* from the fridge. 【正答率57%】

(1)～(5) は空間と時間の仕切りを問題とした例であるが、全般的に正答率がかなり低い。これは、同じ名詞が文脈次第で不定冠詞 *a* を付けても付けなくても用いられ得るからであろう。たとえば、(1) の英文はもし「もう一人泊まれる部屋はありますか」という意味で使われると、部屋は空間が仕切られているので不定冠詞が付与され、*a room* となる。(2) も、*heaven* が「天国」という意味で使われると、空間の仕切りがあるので *a heaven* となる。(3)～(5) の時間に関しても同様の考え方が当てはまり、時間が区切られているかどうかで不定冠詞の有無が決まる。たとえば、(4) は「一瞬」の沈黙なので *silence* に *a* が付与されるが、「*silence means consent*」のような時間の区切りを意識しない表現では無冠詞である。また、(5) の *progress* は長期的に捉えられるものなので、不定冠詞 *a* とは共起しないとされている。ただし、(4) と (5) には微妙な判断が含まれるようで、筆者の行った冠詞調査では英語母語話者の回答にも若干のばらつきが見られた。

(6)～(9) も「仕切られているかどうか」が不定冠詞の有無を左右する例である。(6) の *a comedy* は、ここでは

一つのまとまった喜劇を表しているが、「*comedy is a funny way of being serious*」のように喜劇一般を指す際には無冠詞となる。(7)・(8) の *lunch・dinner* も、(7) はどのような昼食かという種類に力点が置かれているので「排除性」(Hawkins, 1978) を有する不定冠詞が付されるが、(8) は食事することに力点が置かれるため無冠詞である。また、*beer* は物質名詞(液体)なので一般的には無冠詞であるが、(9) では *beer* を缶ビールのように一つの区切られた単位として扱っているので不定冠詞 *a* をともなう。

次に、(ii) で挙げた「元の形が失われたかどうか」に関わる例を見てみよう。ここでもすべて、可算としても不可算としても使用可能な名詞を扱っている。

- (10) あごにバナナが付いていますよ。

You've got *banana* on your chin.

【正答率29%】

- (11) 私のサラダにはリンゴが入ります。

My salad has *apple* in it.

【正答率24%】

- (12) 昨夜、私たちは鶏肉を食べた。

We ate *chicken* last night.

【正答率50%】

- (13) このカバンはすべてワニ革です。

This bag is *crocodile* throughout.

【正答率34%】

- (14) 彼女は黒髪だ。

She has black *hair*. 【正答率48%】

- (15) タクシーでそこへ行った

We went there by *taxi*. 【正答率67%】

(10)・(11) は「丸ごとか部分か」がポイントとなる例であるが、正答率が(10)

は29%で下から4番目の低さであり、(11)は24%で全設問中もっとも低かった。これはバナナやリンゴが通常、可算名詞として扱われ、それが日本人英語学習者の脳裏に強くインプットされているからであろう。しかし、たとえば(10)で *a banana* とすると、「形あるモノのリンカクが1つ、頭の中に描かれる」という先ほどの津守(2008)の「a」の定義通り、バナナが丸ごと1本あごに付いているようなおかしい表現となるため、食べかすが付いている場合には無冠詞である。(11)も同様、リンゴはふつつ切り刻まれてサラダに入るので無冠詞となる。こうした用法は日本ではあまり教えられないため、正答率が低かった。(12)・(13)はその延長で「個体か加工品」を問題としているが、いずれも加工されて元の形が失われているので無冠詞となる。(14)の *hair* も1本1本を問題とする場合以外は、通常、不可算名詞扱いで無冠詞である。また、(15)は個体としてのタクシーではなく、「タクシーで行く」という行為を問題としており、動詞の一部のような扱いになっているので無冠詞となるが、交通手段が無冠詞であることは日本の英語教育で教えられているからか、正答率は67%と比較的高かった。

4. 定名詞と不定名詞の使い分け (定冠詞 vs. 不定冠詞・無冠詞)

次に定名詞と不定名詞の使い分けについて考察しよう。定冠詞による指示の分類は表1のようにまとめることができるであろう²⁾。この分類に則して、調査に用いた例文を挙げると、次の(16)～(26)のようになる。

【表1】 指示の分類

endophora (テキスト 内照応)	① anaphoric (前方照応的)	例(16) -(17)
	② cataphoric (後方照応的)	例(18) -(19)
exophora (外界照応)	③ circumstantial (現場状況的)	例(20)
	④ encyclopedic (百科事典的)	
	⑤ categorical (カテゴリー的)	例(21) -(26)

- (16) 結婚式を見た。花嫁が美しかった。
I saw a wedding. *The bride* was beautiful. 【正答率85%】
- (17) 私はロンドンまで快適な旅をした。
I went to London, and *the journey* was comfortable. 【正答率72%】
- (18) これが私の生まれた家だ。
This is *the house* where I was born. 【正答率74%】
- (19) ペルーは地球の裏側にある国だ。
Peru is *a country* which is on the other side of the earth. 【正答率43%】
- (20) おいで！雨の中で遊ばないで。
Come in! Don't play in *the rain*! 【正答率62%】
- (21) 彼は日給で支払われていた。
He was paid by *the day*. 【正答率26%】
- (22) 私はピアノを弾きません。
I don't play *the piano*. 【正答率85%】
- (23) 太陽は東から昇る。
The sun rises in *the east*. 【正答率70%】
- (24) どちらの方向が北ですか。
Which way is *north*? 【正答率29%】
- (25) 私は海よりも山のほうが好きだ。
I like *the mountains* better than the

sea.【正答率64%】

(26) トラはほとんど絶滅しつつある。

The tiger is becoming almost extinct.【正答率41%】

(16)・(17) はテキスト内前方照応のなかでも、先行詞と後続の定名詞句の間に連想が必要な照応の例である。今回の調査ではそのような例を4問出題したが、いずれも正答率は72~85%と高かった。著者はこれまで連想照応の研究を行い、こうした照応は先行詞と後続定名詞句が同じものを指す同一照応よりも理解が困難であることを示してきたが³⁾、それでも冠詞の用法全体から見ると、理解しやすい照応であったことが今回の調査で判明した。(18)・(19) は、後続の関係節の意味内容によって先行詞の定・不定が決められるという、テキスト内後方照応の例である。(18)は後続の関係節がhouseを唯一的に限定しているので「包括性」のある定冠詞が付くが、(19)の関係節は補足的な説明であり、地球の裏側にはペルー以外の国もあるので、そのうちの一つという意味で「排除性」のある不定冠詞が用いられる。定冠詞が付く(18)の正答率が74%なのに対し、不定冠詞を使用する(19)は43%と低くなっている。

(20)~(26) は外界照応の例である。(20) は表1の「③現場状況的」な外界照応であり、また、ここでは「④百科事典的」な用例は挙げていないが、the world, the sun など、一般的知識で定冠詞が付与される多くのものがこれに含まれる。これら2つのタイプは比較的分かりやすい。

少し複雑なのは、最後に挙げた「⑤カ

テゴリー」な外界照応の場合である。このカテゴリー的照応の区分には、(i) かたまりを作って区切るthe、(ii) 総称を表すthe、の2つが含まれると考えられる。(i) は、久野・高見(2004)で「異種集合での限定化」と言われる機能をもつtheと捉えることができ、たとえば(21)のthe dayは、weekでもmonthでもなくdayを「単位」とするという意味で、異種集合での限定化機能をもつtheが付与されていると考えられる。これは正答率が26%で、下から3番目の低さであった。(22)のpianoに付くtheも、他の楽器ではなくピアノを弾くというニュアンスで用いられており、楽器の演奏の場合にはこのように定冠詞をとまなうのが普通である。こちらは学校文法でも強調されているためか、正答率は85%で調査全体のなかでもっとも高く、(21)とのギャップが目立った。ただし、たとえば“*She once had played piano for silent films*” (p.74、樋口2003)のように職業として楽器を演奏する場合などは、他の楽器と対比的には用いられず、むしろ先の3節で挙げた⑨の基準通り、pianoが動詞の一部のように扱われる。そうした場合には無冠詞となるので、必ずしもいつも楽器にtheが付くわけではない点に注意が必要であろう。

また、(23)・(24)はどちらも方向を表す例であるが、(23)は空間を東西南北に4分割し、そのなかで「東にある空間」を限定的に指示するためにtheが付与されるが、(24)では「真北」を表す表現としてnorthは無冠詞で用いられる。(23)は教科書に出てくる類いの表現なので正答率は70%あったが、(24)は29%し

がなく、大きな差が認められた。(25)も先に述べた「(i) かたまりを作って区切る the」の一例であり、the sea と対比させて用いているので mountains に the が付されるが、一般的に mountains を指す場合には、「I like *mountains*」ように無冠詞となる。最後の (26) は「(ii) 総称を表す the」の例であり、tiger に the が付されるのは、他の種と対置させて tiger を限定化しているためと考えられる。それに対し、不定冠詞 a は同種集合からのサンプリングを表すので、「*a beaver builds dams*」のように恒常的状态や習慣を表す場合には、the よりも a が用いられるのが一般的である。

5. 「冠詞の使用についての調査」について

5.1 調査の目的

以上で概観した英語の冠詞の特徴を踏まえたアンケート形式の調査を行い、日本人大学生を中心とする英語学習者(255名)と英語母語話者(6名)の冠詞の使い分けを調べることで、英語学習者にとってどのような冠詞の用法が困難なのかを考察した。

5.2 調査の詳細

アンケート調査では、最初の5問で「国籍」、「身分」、「回生」、「受験した資格試験」、「資格試験のスコア域」を尋ね、続く30問で冠詞の使用についての調査を行った。調査方法は、先の例(1)のように、まず日本語文を挙げ、次に対応する英語文を示したが、英語文には括弧で空欄を作り、被調査者に「冠詞なし」「a」「the」を選択してもらった。回答はすべ

てマークシートに記入する方式をとった。

5.3 調査結果

調査対象者(合計261名)の内訳と平均点・平均正答率は、表2の通りである。このなかで、とくに英語レベル(TOEIC[®]に換算したスコア域別)と冠詞調査での平均正答率との相関に焦点を当ててグラフ化したものが図2である。また、表3では正答率の高い設問から順番に、問題の英文と正答、および関連情報を記載している。「設問」欄には、実際の調査で用いた設問番号(6)～(35)を記した。表4では、各設問の選択肢ごとの実際の回答数とパーセンテージが正答率の高い順からすべて記されており、濃色部分が正答である。正答の回答数とそのパーセンテージは、他の選択肢よりも大きめに太字で表示している。

5.4 結果分析

調査結果を分析することにより、冠詞の使用に関するいくつかの重要な特徴が見えてきた。

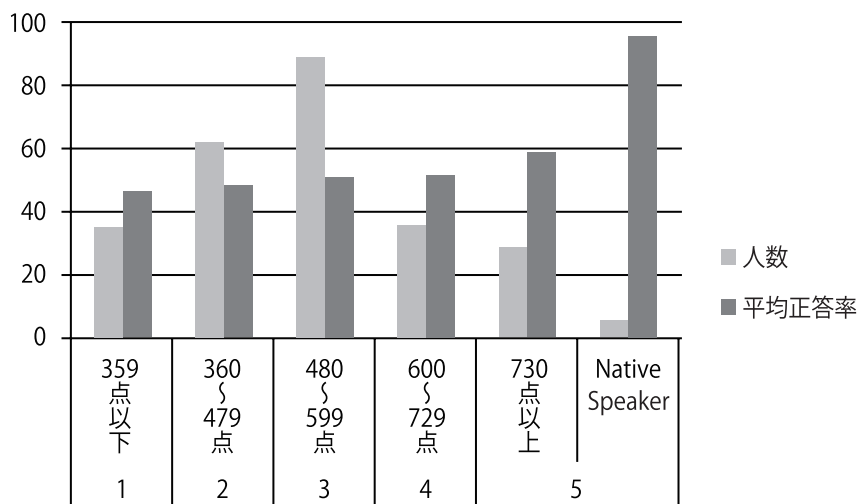
第一に、図2で明らかなように、被調査者のTOEIC[®]等のスコア域別の英語力のレベルと冠詞調査の平均点には、予想に反し、必ずしも大きな相関は見られなかった。調査全体の平均正答率は51.7%であるが、スコア域がもっとも低いレベル1(TOEIC[®]359点以下)の平均正答率が46.6%、レベル2(360～479点)が48.4%、レベル3(480～599点)が51.0%、レベル4(600～729点)が51.8%である。一応、少しずつ正答率が上がっているとはいえ、TOEIC[®]スコア

【表2】 調査対象者(合計261名)の内訳と平均点・平均正答率

設問\回答	1	2	3	4	5
1. 国籍	日本人	中国人	韓国人	英語母語話者	その他
人数	241	10	4	6	0
平均点	15.1	16.5	15	28.8	
平均正答率	50.5%	55.0%	50.0%	96.1%	
2. 身分	大学生(立命館)	大学生(同志社)	大学院生	教員	その他
人数	216	34	5	6	0
平均点	14.9	16.4	18.8	28.8	
平均正答率	49.8%	54.5%	62.7%	96.1%	
3. 回生	大学1回生	大学2回生	大学3回生	大学4回生+	その他
人数	55	46	91	58	11
平均点	15.5	15.4	14.8	15	24.3
平均正答率	51.6%	51.4%	49.5%	50.1%	80.9%
4. 受験試験	TOEIC®	TOEIC Bridge®	TOEFL ITP®	TOEFL iBT®	その他
人数	155	45	43	8	10
平均点	16.2	15.2	15.3	15.3	22.9
平均正答率	52.1%	50.9%	50.9%	50.8%	76.3%
5. スコア域*	【低】1	2	3	4	5【高】
人数	35	62	89	36	29
平均点	14	14.5	15.3	15.5	17.8
平均正答率	46.6%	48.4%	51.0%	51.8%	59.2%

*「スコア域」の人数は、英語試験を受けていない者10名(英語母語話者を含む)を除く

【図2】 英語レベル(TOEIC®換算のスコア域別)と冠詞調査の平均正答率



【表3】 調査結果：正答率順(高→低)

*「正答」欄のφは無冠詞(ゼロ冠詞)を表す

No.	設問	項目	ポイント	英 文	正答	正答者数	正答率
1	7	定vs.不定 vs.無冠詞	楽器の演奏	I don't play () piano.	the	222	85%
2	23	定vs.不定	前方照応(連想)	I saw a wedding. () bride was beautiful.	The	221	85%
3	26	定vs.不定	前方照応(連想)	I walked into a big room. () ceiling was high.	The	219	84%
4	34	定vs.不定	前方照応(連想)	He found a mast. () boat was in good shape.	The	208	80%
5	24	定vs.不定	後方照応	This is () house where I was born.	the	194	74%
6	30	定vs.不定	前方照応(連想)	I went to London, and () journey was comfortable.	the	187	72%
7	35	定vs.無冠詞	領域の限定	The sun rises in () east.	the	182	70%
8	8	可算vs.不可算	交通手段	We went there by () taxi.	φ	169	65%
9	13	定vs.無冠詞	「海」に對置	I like () mountains better than the sea.	the	167	64%
10	15	定vs.無冠詞	外界照応	Come in! Don't play in () rain!	the	162	62%
11	19	定vs.不定	外界照応	You rat, you are () murderer.	the	162	62%
12	9	可算vs.不可算	種類の問題	I had () light lunch at the cafeteria.	a	152	58%
13	22	可算vs.不可算	単位の問題	I grabbed () beer from the fridge.	a	150	57%
14	14	定vs.不定	身体部位	She has a pain in () knee.	the	147	56%
15	6	可算vs.不可算 II	動物か肉か	We ate () chicken last night.	φ	130	50%
16	27	可算vs.不可算	物質名詞	She has () black hair.	φ	126	48%
17	25	可算vs.不可算	時間の区切り	For a moment, there was () silence in the car.	a	120	46%
18	11	可算vs.不可算	まとまりある作品	This movie is () comedy about a rich man.	a	116	44%
19	33	定vs.不定	後方照応	Peru is () country which is on the other side of the earth.	a	111	43%
20	18	定vs.不定	総称表現	() tiger is becoming almost extinct.	The	108	41%
21	12	可算vs.不可算	空間の仕切り	I was in () heaven when I heard the news.	φ	95	36%
22	21	定vs.不定	時間の区切り	This school has () history of 100 years.	a	95	36%
23	17	可算vs.不可算	種類の問題	We invited him to () dinner.	φ	90	34%
24	20	可算vs.不可算 II	動物か草か	This bag is () crocodile throughout.	φ	88	34%
25	29	可算vs.不可算	時間の区切り	She is making () great progress in French.	φ	82	31%
26	31	定vs.無冠詞	基本方位	Which way is () north?	φ	76	29%
27	16	可算vs.不可算 II	丸ごとか部分か	You've got () banana on your chin.	φ	75	29%
28	28	定vs.不定 vs.無冠詞	単位の the	He was paid by () day.	the	68	26%
29	32	可算vs.不可算	空間の仕切り	Is there () room for one more person?	φ	64	25%
30	10	可算vs.不可算 II	丸ごとか部分か	My salad has () apple in it.	φ	63	24%
						平均正答率	51.7%

【表4】各設問の選択肢ごとの回答数とパーセンテージ(正答率順：高→低) [濃色部分が正答]

No.	設問	冠詞なし	%	a	%	the	%	無回答	総数
1	7	12	5%	27	10%	222	85%		261
2	23	5	2%	35	13%	221	85%		261
3	26	13	5%	29	11%	219	84%		261
4	34	8	3%	45	17%	208	80%		261
5	24	14	5%	53	20%	194	74%		261
6	30	45	17%	29	11%	187	72%		261
7	35	54	21%	19	7%	182	70%	6	261
8	8	169	65%	36	14%	56	21%		261
9	13	82	31%	11	4%	168	64%		261
10	15	67	26%	32	12%	162	62%		261
11	19	44	17%	55	21%	162	62%		261
12	9	92	35%	152	58%	17	7%		261
13	22	46	18%	150	57%	64	25%	1	261
14	14	75	29%	39	15%	147	56%		261
15	6	130	50%	99	38%	32	12%		261
16	27	126	48%	117	45%	18	7%		261
17	25	120	46%	120	46%	21	8%		261
18	11	45	17%	116	44%	100	38%		261
19	33	7	3%	111	43%	143	55%		261
20	18	82	31%	70	27%	109	42%		261
21	12	95	36%	32	12%	134	51%		261
22	21	47	18%	95	36%	119	46%		261
23	17	90	34%	29	11%	141	54%	1	261
24	20	88	34%	94	36%	79	30%		261
25	29	82	31%	138	53%	41	16%		261
26	31	76	29%	12	5%	173	66%		261
27	16	75	29%	137	52%	48	18%	1	261
28	28	23	9%	170	65%	68	26%		261
29	32	64	25%	139	53%	58	22%		261
30	10	63	24%	186	71%	12	5%		261
集 計		合計数	平均%	合計数	平均%	合計数	平均%	合計数	合計数
		1939	24.8%	2377	30.4%	3505	44.8%	9	7380

の上昇に比べるとそれほど顕著な伸びとは言えない。スコア域がもっとも高いレベル5(730点以上)になると、平均正答率は59.2%に上がるが、それでも英語母語話者の96.1%には遥かに及ばない。このことは冠詞の習得が日本人英語学習者にとっていかに困難であるかを示唆している。英語力が伸長しても、冠詞の習熟度はそれと同じペースで伸びるわけではなく、英語学習者にとって冠詞はいつまでも難しい文法項目であり続けるであろうことが今回の調査で明らかになった。

第二に、表3を見ると、上部にある正答率の高い項目は「定 vs. 不定」を扱ったものが中心であり、正答率の低いものは「可算 vs. 不可算」名詞の使い分けに関連したものが多くことが分かる。つまり、日本人英語学習者にとって、定・不定の区別よりも可算・不可算の区別のほうが困難なのである。定・不定は話し手と聞き手の存在を考慮して語用論的に使い分けることが中心となるが、名詞の可算・不可算を決定するのは基本的には意味論領域の問題である。言語外のさまざまなコンテキストを広く考慮に入れなければならない語用論領域の問題とは異なり、意味論領域ならば言語内の問題としてある程度体系的に考えることができるであろう。したがって、カリキュラムに組み込んで包括的かつ明示的に教えることが可能ではないかと思われる。そのような点では、日本人学習者にとって改善を見込める余地がある。実際、学校文法でよく出てくる項目については正答率が高かったことを強調しておきたい。

第三に、表4から分かるように、英語学習者の回答には「the」の選択が多く、全

設問の総回答数の44.8%を占めた。次に「a」が30.4%を占め、「無冠詞」は24.8%で一番少なかった。以上から全体の傾向として認められるのは、被調査者が「無冠詞」「a」「the」の選択を迫られた際、何らかの冠詞を付けなければならないと考え、「よく分からないけれど、とりあえずtheを付けておこう」という選択をする場合が多い点、theでなければaを選択し、無冠詞(ゼロ冠詞)は選択しにくいという点である。実際、正答率の高い設問から順に上位7位まではすべてtheが正答であり、11位まででも8位以外はtheが正答であったが、これは、たまたま正答がtheであったために、theを選択する傾向のある被調査者の回答と正答とが一致して正答率が高くなったのではないかと思われる。そうした点を考慮すると、theで正答を出していても、必ずしも皆が冠詞の用法を理解しているとは限らない。また、正答の配分が、「冠詞なし」が11問、「a」が6問、「the」が13問であったことも、theの総回答数の多さに影響を与えている可能性がある。ただ、いずれにしても、「冠詞といえばthe」と考える日本人英語学習者の傾向は明らかにできたので、今後は設問の方法などをさらに工夫し、真の理解を確認できるようにすることが課題であろう。

6. おわりに

本稿では、まず英語の冠詞の使い分けに関わる現象をさまざまな用例を挙げて概観し、冠詞が一つのシステムとして英語母語話者の捉えている世界をどのように構造的に映し出しているのかを考察した。次に、その使い分けが実際にどのよ

うに行われているかを調べるために、日本人英語学習者を主な対象として「冠詞の使用についての調査」を実施し、その結果を分析した。それにより、(i) 日本人英語学習者は英語のレベルが上がっても冠詞に関わる習熟度はそれほど上がらない、(ii) 定・不定の使い分けよりも、可算・不可算の区別に困難を感じる、(iii) 何にでもとりあえず定冠詞 the を付与する傾向がある、という点を明らかにすることができた。冠詞を真の意味で「習得」することは、日本人英語学習者にとっては大きなチャレンジであるが、英語教育のなかで補える「学習」の部分があることも明白にできたと考える⁴⁾。冠詞を理解し、使いこなすことは、英語母語話者の心のなかに描かれている世界を知り、円滑なコミュニケーションを行なっていくことにつながる。今後は少しでも母語話者の英語の世界に近づけるよう、冠詞についての研究をさらに深め、調査の方法などを吟味するとともに、英語教育への応用についても検討していきたい。

注

- 1) ここでの分類は石田 (2012) を中心とするが、他の視点も交えている（とくに⑧・⑨）。また、例文に関しても同書に掲載されたものが中心である。
- 2) 織田 (2002) 参照。
- 3) 高坂 (2001、2004) 参照。
- 4) 「習得」と「学習」については、Krashen and Terrell (1983) 参照。

主な参考文献

Hawkins, John A. (1978) *Definiteness and Indefiniteness*. London: Croom

Helm.

樋口昌幸 (2003) 『[例解] 現代英語冠詞事典』大修館書店。

石井隆之 (2003) 『冠詞マスター教本』ベレ出版。

石田秀雄 (2002) 『わかりやすい英語冠詞講義』大修館書店。

_____. (2012) 『これならわかる！英語冠詞トレーニング』DHC。

高坂京子 (2001) 「連想照応と推論のメカニズム—英語の母語話者と日本人学習者を対比させて」『立命館文学』第 568 号

_____. (2004) 「連想照応における指示表現の解釈について—言語間比較の視点から」『言語研究の接点—理論と記述』英宝社。

Krashen, S.D. and Terrell, T.D. (1983) *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. London: Prentice Hall Europe.

久野暉・高見健一 (2004) 『謎解き英文法 冠詞と名詞』くろしお出版。

織田稔 (2002) 『英語冠詞の世界—英語の「もの」の見方と示し方—』研究社。

津守光太 (2008) 『a と the の底力』プレイス。

付記

本稿は表現学会 50 周年記念大会で発表した内容に加筆修正をほどこしたものです。貴重なご質問・ご助言を賜りました先生方に、記して感謝申し上げます。

(立命館大学)